

歴史小説の周圀

歴史エッセイ集 Ⅰ

井上 靖



れきししょうせつ しゅうい
歴史小説の周囲 歴史エッセイ集 I

いのうえ やすし
井上 靖

© Yasushi Inoue 1983



講談社文庫

定価340円

昭和58年5月15日第1刷発行

発行者——三木 章

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社東京印書館

印刷——株式会社東京印書館

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-183036-8 (0)



講談社文庫

歴史小説の周囲

歴史エッセイ集

井上 靖

目次

I

「唐大和上東征伝」の文章	二
「天平の薨」の登場人物	一七
私の敦煌資料	二
西域のイメージ	二六
「蒼き狼」の周囲	三三
自作「蒼き狼」について	三九
「おろしや国酔夢譚」の旅	五
安閑天皇の玉碗	六
白瑠璃碗を見る	八
「風濤」の取材	八
「後白河院」の周囲	七

II

明治の風俗資料

一〇七

戦国時代の女性

一三二

「信貴山縁起絵巻」第一巻を観る

一三三

桑原隲藏先生と私

一四九

木乃伊考

一五五

ゴンチャロフの容貌

一六〇

長恨歌讃

一六四

肯定と否定

一六七

「むらさき草」の著者

一七〇

茶々のこと

一七三

III

シベリア紀行

一七九

西トルキスタンの旅

一八九

大和朝廷の故地を訪ねて

一九七

飛鳥の地に立ちて

二三三

西安の旅

二三二

揚州紀行

二三二

長城と天壇

二四七

万曆帝の墓

二五五

あとがき

二六六

歴史小説の周圀

歴史エッセイ集

1

〔本書は、昭和四十八年一月、小社より刊行〕

I

「唐大和上東征伝」の文章

「唐大和上東征伝」を初めて読んだのは昭和三十年の秋である。当時早稲田大学の安藤更生博士が大著「鑑真大和上伝の研究」の仕事に取りかかっておられる頃で、自分は学究として鑑真伝の研究をするが、あなたは小説家として、鑑真伝を小説の形で書いてみないかというお話があり、半ば氏におだてられ、半ば氏にもたれかかるような気持で、鑑真来朝の経緯を小説化してみようかという気持になったのであった。

私は鑑真については殆ど知るところなかった。僅かに知っていることと言えば、唐招提寺開山堂の鑑真の乾漆像と、それに対する気持を述べた芭蕉の有名な俳句ぐらいのものであった。

「唐大和上東征伝」は、奈良時代の高名な文人淡海三船の筆になったものである。わが国に正しい戒律を伝え、東大寺に戒壇院を設けて、わが国の授戒制度を根本的に刷新した唐

僧鑑真の来朝は、奈良時代の文化的事件の中の最も大きいものであるが、その鑑真来朝の経緯は今日「唐大和上東征伝」に依って知ることができるだけである。鑑真が日本の留学僧栄叡、普照の懇請に依って、法のために渡日を決心したこと、その渡日の計画は何回も挫折し、途中海南島に漂着するといった困難にまで遇い、漸く六回目に志を果したことが、そういったことは尽く、「唐大和上東征伝」のお蔭で今日に伝わっているのである。

「唐大和上東征伝」は何冊かの筆写本、何冊かの版本に依って今日に伝えられているが、私が読んだのは宝暦十二年に東大寺戒壇院で開版した所謂戒壇院刊本である。勿論原本ではなく、原本そのままに影印し、昭和二十一年に京都の高桐書院から発行されたもので、編著者は水野清一氏、詳細な解説が神田喜一郎氏に依って書かれ、それが附せられてあった。「唐大和上東征伝」は、筆写本、版本のそれぞれに依って、多少題名が変わっているが、私が読んだ高桐書院発行のものは、その原本である戒壇院刊本に依って、「法務贈大僧正唐鑑真過海大師東征伝」と頗る長い題名になっている。

この書を何日も机の上に置いたが、原文の漢文には閉口した。仏教関係の熟語や、異国の植物名、唐の官職名などで判らないところはとばして読んで行ったが、地方官吏の役名などには、役名とも人名とも判断のできぬものがあって、解読に難渋した。しかもそうしたところは随所にあった。

私は、「唐大和上東征伝」の小説化などということが、自分の力の及ばぬいかに容易なら

ぬことであるかにすぐ気付いたが、それでも兎も角、それを一応読み終えた。読み終えたというよりは読み終えさせられたと言った方がよかった。と言うのは、判らぬところは沢山あったが、それでもなお途中でやめることができなかったからである。何と言っても、文章に大きい魅力を感じた。文章は短くびしりびしりと切られてあり、簡にして要を得ていることは言うまでもないが、その中に何とも言えぬ一種独特のリズムカルな調子があった。

——桂江ヲ下ルコト七日、梧州ニ至ル。次デ端州ノ竜興寺ニ至ル。栄叡師奄然トシテ遷化ス。大和上哀慟悲切ナリ。喪ヲ送リテ去ル。

日本僧栄叡が艱難かんなんな旅の途中で他界する場面であるが、旅の忽々そうそうのうちの大きな悲歎を、少い用語で力強く書き現わしていて、みごとと言うほかはない。

——岸ヲ去ルコト漸ク遠クシテ風急ニ波峻シ。水黒キコト墨ノ如ク、沸浪シテ一タビ透ツテ高山ニ上ルガ如ク、怒濤再ビ至ツテ深谷ニ入ルニ似タリ、人皆荒醉シテタダ観音ヲ唱ウ。舟人告ゲテ曰ク、舟今ヤ没セント欲ス。何ノ惜シムトコロカアラン、即チ棧香籠ヲ牽イテ抛タント欲ス。空中ニ声アツテ言ウ、抛ツコト莫レ、抛ツコト莫レト。即チ

止ム。

天宝七載六月に鑑真一行は第五回目の船出をするが、十月に暴風雨に遇い、ついに海南島に吹き流されてしまう。これはその暴風雨に遇った時の描写で、しかもその時空中に声があったという変異を正面から描いて、いささかの奇異の感じをも読む者に懷かせない。これまたみごとというほかはあるまい。

このような箇所は「唐大和上東征伝」の中から幾らでも引き出すことができ、このようなおうちのみかた淡海三船の文章の魅力に惹かれて途中で棄てることができなかったのである。

その後毎日新聞社の松本昭氏より「唐大和上東征伝」の和訳本を頂戴した。昭和十七年に大阪の堀朋近氏が発行して知人に配られたものらしく、薄い小冊子様のものであるが、それに中村詳一氏の筆で全文が訳されてあった。これを入手したことで、私は初めて「唐大和上東征伝」の全文をらくに読み下すことができ、更に安藤博士を何回も煩わすことに依ってその背景となっている歴史についての知識を得ることができたのである。

併し、これで「唐大和上東征伝」の小説化に踏みきるわけには行かなかった。一番大きい問題は、淡海三船の筆に依る「唐大和上東征伝」が、鑑真一行来朝の経緯、当時の奈良仏教界の事情、または唐土における日本留学僧たちの動静などを知る上に、多くの史的価値を持っていることは言うまでもないが、そうしたことは別に、これが独立した文学作

品として非常に優れたものになっていたということである。すでに淡海三船のみごとな「唐大和上東征伝」がある以上、更にこれを小説化する意義があるかどうか、このことのために、私は長い間筆を執ることができなかった。

淡海三船の「唐大和上東征伝」は、鑑真一行の来朝の経緯を伝えた最初の本ではない。この本の書かれる前に、鑑真に随って一緒に日本へ来た唐僧思託しだくに依って、「大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝」なるものが書かれている。ただそれが残念なことに散佚さんいつして今日に伝わっていないのである。

思託は「延暦僧録」の著者で、その著の中に著者自身の伝記である「従高僧沙門釈思託伝」というのが収められてあり、そこに思託の要請に依って、淡海真人元開が鑑真東行のいきさつを筆に載せたということが記されている。

従って、淡海三船の「唐大和上東征伝」は淡海三船が思託に請われて、思託が書いた鑑真伝にもとづいて、鑑真の東行記を自らの筆で書き改めたものと見られている。思託の鑑真伝は、古書に「伝戒大師三卷伝」とか「唐招提寺大和上三卷伝」とか記されているところからみてもかなりの量のものと思われるので、淡海三船の「唐大和上東征伝」は、それを簡略にしたものと思われる。謂ってみれば思託の鑑真伝の略本ということにでもなるうか。

それならば何のために思託は自分自身が綴ったものの他に、淡海三船を煩わして別の略